

森鷗外の「うたかたの記」の研究

李 仁 嬋

目 次

一、序 論	2、巨勢の書題
二、本 論	3、マリイとの袂別
1、鷗外のドイツ留學と 「うたかたの記」	三、結 論
	四、國文抄録

1. 序 論

森鷗外の初期三部作の中の「うたかたの記」ははじめ明治二十三年八月二十五日發行の「志がらみ草紙」¹⁾第十一號に發表され、翌々年の二十五年七月に「水沫集」²⁾(「美奈和集」)を上梓するにあたって、その巻頭に掲げられた作品である。竹盛天雄氏の指摘するところであるが、³⁾「水沫集」の「水沫」とは「あたかも題言のように巻頭作の榮譽を與えられ」た「うたかたの記」「うたかた」⁴⁾と氣脈を通ずるものであろうし、おそらく「水沫集」編纂時においてはこれをもって作者第一の自愛の作としたに相違あるまい。

人文大學 助教授

- 1) 志がらみ草紙——明治二十三年八月、鷗外の編輯した評論雑誌
- 2) 水沫集——鷗外の歸國後三年ほどの間に發表した、批評・評論を除く文業のほぼ全部のものが明治二十五年の夏刊行された書物。これは二篇の虚曲と附録の形での譯詩集「於母影」を含んでいる 翻譯短篇小説集
- 3) 竹盛天雄——「『うたかたの記』の想像——鷗外のロマンチズム(「解釋と鑑常別冊現代文學講座 明治文學 1」昭和2)
- 4) 「うたかた」——鷗外の小説「うたかたの記」の題名は、「消えて迹なきうたかたのうたてき世を御ちあかしつ」の一節に使われた「うたかた」(泡沫)という語から來ている。「鷗外全集(東京・岩波書店・一九三六年刊)二卷六五頁」

「うたかたの記」はヒロインのマリイを介して、虚構としての「遠きやまとの奮工」巨勢の物語と歴史的事實たるバワリアの狂王ルウドヴィヒ二世⁵⁾の溺死事件とを一つの香り高いロマンの中に織りまぜて一篇の悲劇に織りなし、若き日の鷗外の夢と願いと、そして絶望を託したものである。

「うたかたの記」は歴史的事實たるルウドヴィヒ二世の溺死事件を素材としている限り、時間的には一八八六年六月十三日の午後七時を焦點にすべて事が運ばれるが同時に地理的にもその舞台となる地の正確な敘述などの中には必ずしも讀者に誤解を與えぬ科學的に客觀的に「正確な敘述」ではなかった。というのはそれ自身を「自己目的」としているのではないからでもあるが、同時にこの作品が作者の心奥に秘められた情懷を託した一つの虚構の世界であることによって、その内面劇の舞台となるミュンヘン及びスタルンベルヒ湖⁶⁾はもはや一つの作者の觀念の王國でもあったからである。

幾頭の獅子の挽ける車の上に、勢よく突立ちたる、女神バワリアの像⁷⁾は、先王ルウドヴィヒ一世⁸⁾が此の凱旋門⁹⁾に据ゑさせしなりといふ。その下よりルウドヴィヒ町を左に折れたる處に、トリエント¹⁰⁾産の大理石にて築きおこしたるおほいへあり。これバワリアの首府に名高き見ものなる美術學校なり。

この冒頭の「女神バワリアの像」の勢いの激しさが強調されるが、これはいうまでもなくその後繰り返しマリイのイメージに重ね合わされてゆくものであり、この作品の謎を解く鍵はこの書き出しの一文の中に秘められている鷗外の女性像でもあった。

巨勢の選んだ素材は、マリイであるが、マリイが巨勢の前に折々バワリアカヴィナス¹¹⁾の如く出現する。マリイの振舞とは、神話の女神——厳しく力強いが、寛容であり、やさしく純粹である女神の持つ二面性、「強烈な印象を持ち」「優雅である」と、マリイを描くことによって完成されている。一方、マリイの印象的な藍色の目は「きらきらと輝く」「青い眼」のバワリア(ギリシャ女神アテネ)つまりローマ神ミネルワのドイツ名で、藝術、知恵、戦争をつかさどる女神で、ヴィナ

5) ルウドヴィヒ二世——(一八四五～一八八六)は一八八四年から一八八六年にかけて君臨したバワリア王

6) スタルンベルヒ湖——ミュンヘンの西南約二十キロにある山湖

7) 女神バワリア像——バワリアはドイツ連邦共和國中の最大國。ドイツの南東部。首都はミュンヘン。以下の物語も主としてミュンヘンを舞台とする。像はバワリア(バイエルン)を象徴する女神

8) 先王ルウドヴィヒ一世——(一七八六～一八六八)は一八二五年から一八四八年にかけてバワリアの王として君臨していた。王は藝術、文學の保護者であった。

9) 凱旋門——ルウドヴィヒ一世が解放戦争(一八一三～一八一五)におけるバワリア軍の功績を記念として建てた勝利記念の門。一八四四年にガルトネルにより着工、一八五〇年メツツゲルによつて完成した。ローマのコンスタンティヌス記念門を模したもので、戦車に乗りライオンに挽かせたバワリアの像は、現在門の上には見られない。

10) トリエント——イタリア北部チロル地方の町

11) ヴィナス——美と愛の女神

スと同じく美と愛の女神¹²⁾である。マリイは巨勢にこの有名な女神像を二度も想起させたのである。マリイはヴィナスの如く最高の美と理想的な愛の象徴である。

この作品の劇的空間へ土地の美術学校の畫學生エキステルに伴われて「遠きやまとの畫工」巨勢が、美術学校の向いなる「カフェ・ミネルワ」にやって来るのだ。このエキステルと命名¹³⁾されたドイツの學友はこの作品世界への巨勢の案内者たるばかりでなく、この小説の結びに、主人公マリイガスタルンベルヒ湖で急に溺死した後、「エキステルはもしやと思ひて、巨勢が「アトリエ」に入りて見しに、彼はこの三日が程に相貌變りて、著しく瘦せたる如く、「ロオレライ」の圖の下に脆きてぞ居たりける」とあるように、いわばこの作品の展開される作者の内面劇を見とどける重要な證人の役割を果たしているのである。こうした役割を擔う人物にさりげなくその後には有名になったドイツの畫家なる實在人物の名を借りるところは脆弱な虚空性に對して是が非でも掌握せずにはせまぬ鷗外のリアリティーの構成力だと言えよう。

不可知な運命の力によって、巨勢はマリイに會いにミュンヘンへやつて來なければならなかつたのだし、マリイは巨勢を誘ってスタルンベルヒの湖へ行かねばならず、二人はそこで夕餉のため三十分待たされ、その間にベルヒ湖で國王に出遇い、マリイは「蘆間隠れの棧」に胸を打って死なねばならなかつたのである。

「うたかたの記」は、鷗外が、ある種の事件とその主題を選んでそれを自分の作品の主題の面に再創造した作品である。それに歐外は非常に注意深く、自作に不自然さを感じさせないように工夫し、それと同時に藝術觀を提唱し得る主要な此題のみを採用したのであった。鷗外はロマンティックな愛の物語と複雑な主題をもった悲劇を結合させて、驚異的な作品を作りあげたのである。それは完全な藝術についての浪漫主義的な觀點をも表わしている。十九世紀の偉大で著名な藝術家の浪漫主義によって歐外は觸發され自らもまた「うたかたの記」に自己の中核ともいうべき理想を表現し得たのである。

Ⅰ. 本 論

1. 鷗外のドイツ留學と「うたかたの記」

日本が歐米各國へ留學生を派遣し始めた幕末から明治初期の搖籃期の明治の留學生は、西洋各國との交通が目覚ましい今日の世界各國への留學生とでは、出發の際の心構えそのものからして異なることは言うをまたない。明治時代の「洋行」という言葉のあの晴れがましさは、今日の留學生にはもはや適用しない。「洋行」という言葉によって象徴される通りに、明治の留學生は、日本とい

12) 美と愛の女神——鷗外全集二卷三九、四二、四四頁

13) エキステル——ドイツの實在の畫家。歐外の親友畫學生原田直次郎の同學生で當時は無名の士であつたが其後南ドイツの新派畫家中屈指の名士である。

う富國強兵の彼に托した重い囑望がかけられていた。あの時代の留學生の双眉には、たしかに國家の存亡がかかっていたのである。そして森林太郎の四年間にわたるドイツ留學、ドイツ體驗には、彼の行動に絶えずつきまどっていたものは、ちっぽけな四つの島からなる日本がいつ外敵によって侵略されぬとも限らない日本の姿だったということである。

「祖國のために」という感情こそが明治の留學生と今日の日本の留學生を直截に分かつ大きな指標といふことができるであろう。そして「ただひたすら祖國の名譽のために努めようではないか」という言葉ほど、森林太郎のドイツ留學の意義を明示するものはないのである。

鷗外がドイツへ向けて横浜を出港したのは明治十七年七月、歸國は二十一年九月までの四年間、年令でいえば歐外の二十二歳から二十六歳までの間のことであった。歐外のドイツ滞在中の時期と都市は、次の如くである

- 一、ライプチヒ：明治十七年十月—十八年十月(一年)
- 二、ドレスデン：明治十八年十月—十九年三月(半年)
- 三、ミュンヘン：明治十九年三月—二十年四月(一年一か月)
- 四、ベルリン：明治二十年四月—二十一年七月(一年三か月)

鷗外のドイツ留學は、明治十七年から二十一年という日本では歐風化の最も盛んな時代—因みにあの鹿鳴館¹⁴⁾の舞踏會はこの期にあたる—であり、西曆でいえば一八八四年—一八八八年であった。

その時のヨーロッパではイギリスが世界の覇權を一手に掌握した世界最強國で、その當時ドイツは十年ほど前の普佛戰爭の勝利の結果、ようやくドイツ帝國として統一された新進國家にすぎなかった。英佛のように早くから中央集權化され市民社會の發展した先進國とは違って、封建制度が後々までも残存し近代的統一國家としての發展が遅れたドイツは、一八八十年代になってようやく目覺ましい活動の緒についたばかりなのであって、ある面では明治の日本と似かよった状況下にあった。

軍醫官としての粹を出ることの出来なかつた森歐外は翻譯家、小説家、劇作家、歴史家、詩人といういくつかの顔に加えて、彼にはもう一つの批評家又は評論家という甚だ重要な顔がある。

ドイツ語に通達した歐外は留學生活の成果として醫學上の業績を修めた他に誰しも先ず擧げるのは文學において「舞姫」うたかたの記」「文づかひ」というドイツのおみやげ小説三作であるといわれる。どの作も日本青年とドイツ女性との淡いロマンスが骨子となっている。三部作のうち最初に發表された「舞姫」は法學士太田豊太郎と貧しい舞姫エリスの戀が主題で、背景はベルリン

14) 鹿鳴館 — 現在の東京都千代田区内幸町山下門内、もと薩摩藩上 敷のあとで博物館のおかれていたところ。すなわち日比谷練兵場(現公園)に臨んで一八八三年(明治十六年)に建てられたヨーロッパ風建築の代表作の一つで、イタリア。ルネサンス風で内部裝飾は華麗をつくした歐化主義時代の官設社交場。伊藤博文總理の發起になる東京舞踏會は鹿鳴館を會場に、こうして鹿鳴館は文明開化の象徴として不夜城を現出したが一九四〇年とりこわされた。

である。そして「うたかたの記」は、洋画家巨勢と貧しいモデル女マリイの運命的なめぐりあいと袂別とを経糸とし、鷗外のミュンヘン滞在當時に起ったバイエルン王¹⁵⁾ ルウドヴィヒ二世と侍醫グツデン¹⁶⁾とのスタルンベルヒ湖(一名ウルム湖)の新聞に出た歴史上の溺死事件をまじえたのを緯糸とした小説である。発表は三作中最後だが事実上はもっとも早い執筆とされる「文づかひ」は、陸軍青年士官小林と、貴族の令嬢イイダ姫とのまことに淡く優雅な交情が全篇のテーマで、背景の主要部分はライプチヒとドレスデンの間のムルデ河流域となっている。これは鷗外が大演習に参加した時の事実をまじえた小説であることは「獨逸日記」でも明らかである。

鷗外は運命のいたづらをテーマとした作品、いわゆる雅文小説に、鷗外なりの世紀末體驗をあてはめる「うたかたの記」には、繊細な感受性と、情熱というより神経に發したていの唯美的な雰圍氣が色濃い。唯美主義者が舌なめずりするようなベルヒ湖畔の狂王の素材は、あくまで背景にとどめられた。全体の清冽な印象は、一語一語、陰影ゆたかみずみずみずしい雅文體のせいばかりではあるまい。青春に特有のシニズムと、八方に氣を配る感受の産物であり、その唯美性はほどよく知性にせきとめられている。

鷗外のミュンヘン滞在時代のこの一年あまりはドイツ留學四年間の中でもっともものびのびと快適に過した時期だったといえよう。彼の専門である衛生學上の研究も順調に着々と進行し、ドイツ文學に限らずヨーロッパ文化全體を廣汎に見通す深い洞察かも次第に涵養され、藝術の香りの馥郁としたミュンヘンで自由を規制される束縛もなく悠々と留學生活を楽しむことが出来たのである。もともとこの町は南ドイツの中心で古來、藝術文化が華やかに開花し、町のたたずまいからして商業都市ベルリンやライプチヒとは大きな徑庭を示している。ミュンヘン時代の鷗外の日記には、詩的な文章があまたちりばめられている。

そうした詩的な感興が度たび「うたかたの記」の舞台であるスタルンベルヒ湖探訪によって培われたのでしようが、明治十九年四月十八日に初めてミュンヘンの南西二十數キロでアルプス山麓にあるこの美しい湖を訪れてからというもの、彼は折りにふれ機をみては、幾たびかここへ足を向けているのである。この湖が彼にとつてドイツで目にした如何なる風景にもまして印象深く忘れ難いイメージとして結晶したのは、初めての探勝後二か月にしてドイツの新聞に報じられたバイエルン國王ルウドヴィヒ二世と侍醫グツデンの溺死という耳目を驚かす事件があったためであるが、それにしても森林太郎の心にはなにかこの湖と強くあい通いあうものが存していたものと思われてならない。バイエルン國王薨去の二週間後に、友人らと誘いあってその遺跡を弔つたというばかりではない、九月三日から十八日までは、ただ一人で湖畔のホテルに滞存して「残暑を避け、兼ねて著述」に専心するという念の入れようである。

ミュンヘンを離れるに際してアルプス山中の雰圍氣を漂わせるスタルンベルヒ湖にのぞむホテル

15) バイエルン王——バワリア王と同じ意味

16) グツデン——(一八二四～一八八六)ドイツの精神科の醫師、バワリア王ルウドヴィヒ二世の侍醫。一八八六年六月十三日、本作に記されているような最後をとげた。

にあつて、森林太郎は初めてドイツにおける自分の姿をじっと思い浮べ回顧してみる時と所を見いだしたのではないか。「うたかたの記」はそのような彼の忘れ難い青春の日々に寄せた美しくも悲しいオードとなったのであった。

2. 巨勢の書題

森嶋外はドイツ四年間の留學から歸朝後まず「しがらみ草紙」によりながら翻譯に、創作に精力的な文筆活動をはじめたことは人のよく知るところである。

「うたかたの記」は明治二十三年(一八九〇)八月の「しがらみ草紙」第十一號に初めて發表された。「うたかたの記」の主人公巨勢は遠き大和の國からミュンヘンの藝術アカデミーにその當時浪漫主義的傾向を持った歴史畫を學びに來た洋畫家である。巨勢は繪の修業のためにドイツ連邦ザクセン王國の首都ドレスデンに來て「畫堂の類うつすべき許を得て」、「エヌス、レダ¹⁷⁾ マドンナ、¹⁸⁾ ヘレナ¹⁹⁾」の名畫を模寫することをもって修業の階梯についた。

六年前の當時ドイツの謝肉祭²⁰⁾の最後の日という日に、通りすがりにミュンヘンを訪れたことがある。このミュンヘンの町には、ルウドヴィヒ第一世によって建てられた凱施門がある。この上には二匹のライオンの挽く戦車に乗った女神パワリアの像が立っている。この街には、かなり高名の土が校長を勤める有名な美術學校がある。學校の向いには、學生達のたまり場、カフェー・ミネルワがあり、一團の美校生がコーヒーや酒をくみかわしながら歡談を交わしていた。

六年後のこの度、このカフェーに訪れた時も美校生の畫工生達はいつもの通りここに集って酒やコーヒーを飲みながら休んでいた。その中に年の頃、十七、八歳の帽子を被つた娘が一人いた。

二人の男がカフェーに入ってくる。一人は日本人の美校生の巨勢、他の一人は巨勢の友人ドイツ人美校生のエキステルである。巨勢は居あわせた學生達に紹介した折に、とあるドイツ娘を探している。とエキステルは語った。巨勢は一同に挨拶し、自分がその娘を探している理由を話し始めた。六年前にミュンヘンを訪れた時オリアンカフェーで會つたドイツの娘マリイのことであるが次のようである。

その年の謝肉祭の最後の日に巨勢は有名なミュンヘンにある美術館を見學した後、オリアンカフェーに休んだことがある。そこに二人の子供がそのカフェーに入ってきた。十五歳ほどの焼栗賣りの少年と十二、三歳位のすみれ賣りの少女であった。少女は非常に品がよく、美しい澄んだ聲をしていた。二人がカフェーの中ほどまで入って來た時、容の一人が連れていた大きな犬が突

17) レダ——ギリンや神話の女性。

18) マドンナ——繪畫、彫刻などにおける聖母マリア

19) ヘレナ——スパルク王テュングレウスの妃レダがゼウス神が白鳥に變じて近づき、レダは白鳥の卵二つをうむ。その一つがヘレナ——になる。美の神。航海の保護神

20) 謝肉祭——「カルネ。ワレは伊太利の語。肉よさらばという意味なり」。「カーニヴァル。キリスト教で四旬節(復活祭前四十日の齋期)に先立ち三日から八日程行われる祝祭。道化・滑稽・歡樂が許され、假面劇などが行われる。

然、粟の入っている箱に鼻先をつっ込んだ。焼栗賣りの子供は慌てて犬を押しよけると、犬は驚いて逃げ出したが、そのはずみにすみれ賣りの少女にぶつかってしまった。少女の手から花籠が落ち、花は床にたたきつけられ汚れて、賣り物にならなくなってしまった。少女は花を拾おうとしたが、カフェーの主人はすぐに店を出て行くようにどなりたてたのであった。巨勢は少女の後を追って失った花の代金として七、八マルクをやった。美しい少女は濃い藍色の目に深い憂いがたたえられていた。

巨勢はその後、ドレスデンに歸って畫額前に座って繪を書こうとすると、あの通りすがりのミュンヘンのカフェーで急場を救ったすみれ賣りの少女マリイの美しさ、就中そこいを知らぬ憂いをたたえた瞳を忘れることができない。そのおもかげが美術館で名畫の模寫に勵もうとする彼の前に立ってちらつき、作品の完成の障害になっているのを巨勢は自覺した。少女の顔や眼なごしを忘れ得ぬまま、その姿を永久に作品に残そうと思いついた。その目ごしは巨勢が今までに見たことのないものであった。そこではげしい懊惱につき落された巨勢は、一朝大勇猛心を奮い起こして「わがあらむ限りの力をこめて、此花賣り娘の姿を「舞窮に傳へむ」と思い立つことになり、こうして彼のロオレイの畫題が決った。

スイスに發したドイツ西南方の山地を流れてライン峡谷を成し、オランダを通過して北海に入る川があるが、そこにはローレイその他、傳奇的な物語とからんだ名勝地が多い。ローレイとはその物語の中の一つで、ライン川の船頭がこのローレイの美しさに惚れて破船し、溺死したという美の魔女である。

マリイの姿を美と愛の理想たるローレイの像に浮べて「無窮に傳へむ」と巨勢が渾身の力を込めて畫くその「ローレイ」の巨勢の構圖とは次のようなものである。

我空想はかの少女をラインの岸の巖根に居らせて、手に一張の琴を把らせ、嗚咽の聲を出させむとおもひ定めにき。下なる流れにはわれ一葉の舟を浮べて、かなたへむきてもろ手高く擧げ、面にかぎりなき愛を見せたり。舟のめぐりには數如られぬ、「エックセン」²¹⁾「ニウムフエン」²²⁾などの形波間より出でて擲擧す。

こうした「ローレイ」の構想が、その當時原田直次郎の屬した浪漫派主義的傾向を持ったミュンヘン歴史畫派の好みの畫風であり、水のモチーフによって最後のスタルンベル湖の慘劇へ通じている。スイスの「ラインの岸の巖根」における「少女」たる「ロオレイ」の美しさに心奮われて見惚れている限り、「一葉の舟を浮べて、かなたへ向きてもろ手高く擧げ、面にかぎりなき愛を見せ」た主人公は、物に熱心になると狂なるし、この一面作中マリイの英雄豪傑、名匠大家となるには多少の狂氣なくしてはかなわぬという言葉を髣髴させるのである。

21) エックセン——ドイツ語で、木の精

22) ニウムフエン——ドイツ語で、川・木・洞穴などの精靈の女人化されたもの。傳奇的畫風。

3. マリイとの袂別

巨勢のマリイを探している理由の話がおわると、その場に居あわせた少女は自分が六年前のすみれ賣りのマリイであると宣言した。巨勢はこのように圖らずも、圖ったように「カフェーミネルワ」において、六年前のすみれ賣りの少女マリイと再會することが出来た。マリイはあのすみれ賣りの夜のお禮にと巨勢の額に口づけをした。そのカフェーのテーブルの美校生達は、これを見て驚き、ひやかし半分に自分達にも口づけをして欲しいとマリイに言った。すると、マリイは激怒し、美校生に向って、口づけをする値しない禮儀知らずの男ども、と叫んで、グラスの水をかけた。マリイがカフェーを出ていこうとする時、學生達は狂人とののしただけけれど、この瞬間のマリイは巨勢にとってはあたかも凱旋門上のパワリアの像のように思われた。

ミュンヘン市に巨勢がやって来たのは、もともと當時のアカデミーの畫風を支配する浪漫主義的、藝術的雰圍氣の中で、ロオレイに装ったすみれ賣り娘マリイの肖像を成就するためであり、その畫像のモデルとしてこの上ない當のすみれ賣り娘その人を見出すことが出来た。これを用いずして他にどんなモデルを用いることができよう。その一週間後、親友エキステルの盡力で巨勢はアカデミーのアトリエの一區畫を借り受けることができ、やがてそこへマリイを迎えることになる。ここでマリイの身上話が始まるのだが、その概要は次のようなものである。

マリイの姓ハンスルとは實は養父母の名で、實父はスタインバハという宮廷畫家である。母は非常な美人で國王がこれにひそかに思いをかけていた。マリイが十二歳の折王宮でのある夜會のさい國王がマリイの母を手籠めにしようとしたが、これを救おうとした父スタインバハは格闘のすえ王に打ちすえられるという事件があった。それから間もなく父は病死する。マリイと母は家をたたんで場末の借住居にうつしたがやがて母も病になった。心細い賣りの末、あくる年の明けて間もない冬のさなか、十三歳のマリイはすみれ賣りの群にまじって辛うじてその日その日を送ることになったが、そのときカフェーオリアンで巨勢に急場を救われるということがあった。その日から数日して母もなくなる。マリイは同じ建物に住んでいた仕立屋一家にひきとられたが、これがいかかわしい仲介業のようなことをする家であった。ある日マリイは見知らぬ男につれられてスタルンベルヒ湖にゆき、そこでボートにのせられて人氣のない岸邊へつれてゆかれるが、身の危険を感じて水に飛び入り、失神してしまう。彼女はハンスという貧しい漁師夫婦に救われ、その養女となり、近くのイギリス人の小間使にやとわれて養父母の生計を助ける。十八の年にイギリス人が歸國したことから失職し、ミュンヘンに出て職業モデルとして自活するようになった。美貌と多少の教養のため畫學生たちに愛されてくらしているが、幼女のころその精神にうけた傷手のせいもあって異性に氣をゆるすことができず、つい奇矯の振舞も多く、人には狂女などといわれる。そのころ一方、國王は、マリイの母に對する失戀もルウドヴィヒ國王の病氣の一因となつたのであろう、嫌人癖が高じて次第に閉じこもって暮らすようになり、やがて眞正の狂人となつて、このスルタンベルヒ湖畔別荘で療養生活を強いられているとの新聞報道があった。

マリイの話に感した巨勢は、その前に膝づこうとすると、マリイは、突然スタルンベルヒ湖行きにさそう。

マリイは何故巨勢を湖畔に連れてきたのか。「さればいかでとおもふおん身に、真心打明けてきこえむもここにてこそと思へば、かくは誘ひまつりぬ」と言う。「真心打明けて」というのはすなわち《「カフェーオリアン」にて恥しき目にあひけるとき、救ひ玉はりし君をまた見むとおもふ心を命にて、幾歳をか経にけむ。先の夜「ミネルウ」にておん身が物語聞きしときのうれしさ》を言わんとすることを指すものであろう。マリイは自分の奇矯の振舞ゆえに、すみれ賣りの娘であった過去を信じてもらえぬらしいもどかしさに、この日の午後長い身上話しをすっかり打明けて話したのであった。このときはすでに巨勢はマリイの言葉をうたがう心は少しもない。兩人の間にあるのはすっかり心を打ち明け合った信頼である。

馬車をやとって走らせ、レオニにて車を下りぬ。左に高く聳えたるは、所謂ロットマンが岡にて、「湖上第一勝」と題したる石碑たてたる虚なり。右に伶人レオニが開きぬという、水に臨める酒店あり。酒店に入りて、夕餉誂ふるに、「七時ならでは整はず、まだ三十分待ち給はではかなはじ」、といふ。カフェーの食事時間にはちよつと時間がある。庭の椅子は雨にぬれている。屋内は暑い。イギリス人のすまいも近く、老漁師夫婦の家は百歩のところだが、マリイの養父母を訪ねるに先立ってこの酒店で二人は憩い、夕食を注文し、それができるまでとボートの上で巨勢とスタルンベルヒ湖上の閑遊を共にしていたマリイは、父がもと王家の高臣で、氣の狂った王がマリイの母を手籠めにしようとしたことから、重臣たちが王の非行をかくすためにかえつて被害者が職を迫られてしまったといういきさつがあった。たまたま侍醫と共にこのスタルンベルヒ湖畔を逍遙していた狂王は、湖上の舟に巨勢と共に、その母に面輪がよく似ていたと思われるマリイの姿をみとめ、マリイの名を呼びながらいきなり水に歩き込み、ついに深みをはまったので、それを救け出そうをする侍醫グツデンと共に溺死してしまった。それを目前にしたマリイも、あまりに突如な出来ごとに失神し、巨勢が王と侍醫の姿に氣をとられている間に水に落ちてしまう。はっと氣づいた巨勢が、ようやくマリイを舟に救い揚げたときは、すでにマリイは息絶えていたのである。

この歴史的ドイツの大事件の日の夕刊には次のような記事があった。

一八八六年六月十三日日曜日の夕刻七時、バウリアの王ルウドヴィヒ二世はスタルンベルヒ湖で溺死した。侍醫グツデンも、ともに死んだが、侍醫の顔面には王の瓜跡が残されていたという噂もある。國王逝去の知らせに、六月十四日、ミュンヘン中は大騒ぎとなった。人々は訃報の告示の前に集まり、争って新聞を買い求めた。街には長い間國民の前に姿を見せなかつた王の死を悲しむ人々が溢れていた。

それにもかかわらず、マリイという可憐な娘も同じ時刻に同じ湖水に落ちて死ぬという悲劇的結末に終わったのだが、國王溺死という大事件の蔭にかくれて誰からも忘れたままになっているのだ、ということである。

Ⅲ. 結 論

「うたかたの記」を代表とする鷗外のドイツみやげの三作は、日本近代文學始まって以來の本格的ノヴェレであるといわれる。本格的ノヴェレというのは、このよういある定まった短篇小説觀に意識的に基づいて制作されたもの、という意味である。事實それは幸田露伴の出發期の諸作と並んで、日本文學が江戸時代の上田秋成以來はじめて持った完全な短篇小説であった。この作品の文學的功績の最大なるものは、ロマンスの情感と一緒に、近代的ノヴェレとしてのきわめて整った形式性を明治文壇に示したということであろう。その中では一つのかぎられたテーマがその萌芽から結着まで、順をおうて、かつ明確な輪廓をもって展開され、それ自體で一つの完結した小世界を形成する。これは後期の鷗外の人生の複雑多岐な様相の中から、家庭や職場やあるいは社交場裡で切り取ってきた一場の情景を寫生したという印象を受ける作品とは違った獨特の意味を持つべき質的に異ったものである。

「うたかたの記」はルウドヴィヒ二世溺死という事件を素材とした最初の文學作品、滯歐中に身近に起ったある社會的事件を材料とし、これに遠慮なく自分の自由な想像による虚構を付加えて創作した。洋畫家巨勢と貧しいモデル女マリイの運命的なめぐりあいと袂別とを緯絲とし、鷗外のミュンヘン滯在當時に起ったバイエルン王ルウドヴィヒ二世と侍醫グッデンとのスタルンベルヒ湖の新聞に出た歴史上の溺死事件をまじえたのを緯絲とした小説である。

不可知な運命の力によって、巨勢はマリイに會いにミュンヘンやって來なければならなかつたのだし、マリイは巨勢を誘ってスタルンベルヒの湖へ行かねばならず、二人そこで夕食の注文のため三十分待たされ、その間にベルヒ湖で國王に出会い、マリイは「蘆間隠れの棧」に胸を打って死ねばならなかつたのである。

ルウドヴィヒ王はマリイの母だけでなく、マリイの美しさの囚となり、暴行しようとする。これが登場人物全員の悲劇の原因となるのである。すなわち、王は失戀のために發狂し、マリイの父は妻に對する王の暴行を防ぐときに王に打たれて病氣になりその後間もなく死に、母もその事件が病因になって死んだ。マリイは孤兒となって貧困のドン底に落ちる。

主人公巨勢とマリイは金だけで結ばれているわけではない、純粹で精神的な愛である。即ちマリイは花賣り娘の頃、助けられたお禮に巨勢の額に精神的な口づけをしたのである。鷗外は叙述と象徴との両面において精神的な愛と巨勢の美に對しての純粹な瞳れと強調したのである。

卑俗な愛の妖怪が、ルウドヴィヒの姿に化して、巨勢ヒマリイとの間に入り込んだ時にすべては悲劇で終ってしまうのである。スタルンベルヒ湖の岸に突然現われたルウドヴィヒ王は、かつてマリイの母親との間に起った事件の一切の記憶が甦り「マリイ」と叫ぶ。そして王は、少女を捕えようとして湖の中に入り溺死する。マリイは卒倒して、湖に落ち、蘆間の棧に胸を打たれて溺死してしまう。巨勢はマリイの悲惨な生涯を悲しみながら一人残される。マリイの生涯は、は

かなく消えてゆく水に浮ぶうたかたのような一生であった。

消えて迹なきうたかたのうたてき世を聊ちあかしつ。

この一行はこの作品の題意となっているところであり、作品全体に流れる「うたかた」の如く消えて行く生命のはかなさに通ずるロマンチズムをその中に凝縮していると言えるだろう。同じ時を巨勢と共に生き、その「生」の燃焼のクライマックスの中にいるマリイが「うたかた」の如く、一瞬間の後にこの世から消え去ることで、獨りとり残された巨勢は、その失ったものの餘りの大きさに悲しむのである。そして、そこから巨勢の凄惨なまでの苦惱がはじまることにもなる。その姿は、この物語の最終部分に次のように映し出されている。

著しく瘦せたる如く、「ロオレイの圖」の下に跪きてぞ居たりける。

「うたかたの記」は、主人公の心理や性格に基づいて生ずる人間的葛藤やドラマによってよりも、まず作品の舞台とその背景をなす歴史的事件の面白さ、珍しさによって読者をうならせることが出来た。虚構性を基礎とする小説の内部に一点読者の眼にそれと明らかな歴史的現實の影を投じて、全体の印象に迫真性を與えようとするのであろう。

國文抄錄

森鷗外(1862~1922)는 日本陸軍 二等軍醫로서 陸軍衛生制度調査 및 軍陣衛生學을 연구하러 독일에서 4年間(1884~1888) 留學였다.

한편 그의 文學活動으로서의 初期 3部作中 「うたかたの記」는 그의 歸國後鷗外 자신이 편집한 評論雜誌「志がらみ草紙」에 발표하였다.

이 作品은 독일 뮌헨 市民階級の 貧困한 독일소녀와 日本留學生 洋畫家 사이의 運命的인 邂逅와 離別을 소재로 하였고 鷗外가 뮌헨의 滞在當時 新聞에 게재된 社會적인 사건을 배경으로 한 것이다. 그 사건이란 1886年 독일 내각이 發蹟을 이유로 루드비히 2世王을 退位시키고 스타른베르히호반에 있는 베르히城에 유폐하였는데 王은 그다음날 1886年 6月 13日 베르히호수에서 侍醫 구먼과 함께 익사한 사실이다.

鷗外는 이 作品에서 歷史적인 事件을 사실 그대로 再現하였으며 人物設定에서는 主人公등 풍부하고 자유로운 想像에 의하여 浪漫的이고 애절한 사랑을 主題로 한 훌륭한 虛構小說을 創作하였다.

「うたかたの記」는 그 當時 소설과는 달리 문학다운 최초의 近代小說이며, 西歐19世紀의 영향을 받은 사실주의와 낭만주의의 두가지 傾向을 代表한 것이라 하겠다.

Summary

“UTAKATA NO KI” Ogai Mori

Lee In-wha

Ogai Mori (1872 to 1922) was ordered as a surgeon lieutenant-colonel to Germany to study a military hospital system and war hygienics for four years (1884 to 1888).

In “UTAKATA NO KI”, one of the fruits of his literary activities, Ogai Mori handled the destined encounter and parting of a poor German maiden belonging to the Munich civil class and a Japanese student studying Western painting in Germany with the incident appeared in the press during his stay in Munich for a background.

In this work, a historical scene of Ludwig II's death by drowning is reproduced. “UTAKATA NO KI” is a masterpiece of fiction dealing with a romantic and tragic love through free creation of characters and vigorous imagination.

Unlike the Japanese literature in those days, “UTAKATA NO KI” is a modern novel early in the Meiji era representing the inclination to realism and romanticism under the influence of Western novels in the 19th century.